

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 復興支援－34

学校名・団体名	長岡市立脇野町小学校
HPアドレス	http://www.kome100.ne.jp/wakinomachi-es/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	「ふるさとおこし」で思考、判断し表現する子ども の育成
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>陸前高田市への訪問、交流活動に向けての活動を中核にして、地域振興や地域復興に取り組む人々の思いにふれるとともに、自分たちの地域の今後や自分の生き方を考える。</p>	

被災地の現状や被災地の方の思いを自分事にひきつけて悩み続ける

普段生活している上では意識しない東日本大震災の被災地の方の暮らしや思い。子どもが現地を2回訪問する中で、生で見て感じたり、人の思いを聞いたりする活動を重ね、とても遠い対象である陸前高田の現状や人の思いを自分事にひきつけているところです。

1回目の被災地訪問、啓介さんは、はじめ、8万本もあった高田松原の松の木が1本を除いて流されてしまった事実には驚きながら、残った一本を保存できてよかったと感じていたことをシートに記していました。グループでの話し合いの中で「1億2千万円もかけて奇跡の一本松を残すなら、他の復興に使った方がいいんじゃない？」という意見を聞き、葛藤しながら、「実際に行って一本松を見てきて、現地の方の希望だけでなく、他の土地の人や100年後の陸前高田市の人たちが津波のことを忘れないために、やはり残すべきだったんじゃないか」と多様な視点から考えを深めるようになっていきます。花梨さんは、他の地域に住む人にとって風化しかけている津波や地震の被害について「忘れないでほしい」と聞いた現地の方の思いをなんとか具現しようと、募金活動の時に何をどうやって伝えようかと悩みながら、「忘れないで」と題した募金を呼びかけるチラシを書きました。考えたこととして「津波や地震で大きな被害を受け、たくさんの人が家族・家・仕事を失ったことを忘れないために…被災地の人の思い、被災地の現状、震災時の気持ちなどを伝えていく」と記しています。



被災地の方とつながろうと、思いや考えを表現する

5年生のときにも被災地訪問をした秀斗さん。花火とコンサートを終え、涙ぐんでいた被災地の方を見て、「また来る…」と決意を新たにしていました。6年生になって1回目の被災地訪問では、積極的に仮設住宅の方と交流し、「被災地の方が笑顔になれるように、去年以上の花火を上げたい」と募金活動で大きな声を上げました。また、現地で行う広田小学校の子どもたちとの交流会、「なないろフェスティバル in 陸前高田」の司会役に立候補し、プロジェクトの仲間と話し合いながら、広田小の子どもと仲良くなれる交流の方法を模索していました。教師として、指名をしたり、先に言いたいことを書かせたりして全員が発言できるようにするよりも、子どもにとって自然に伝えたいくなるような思いがもてる活動になるよう、また、これは伝えなければという必然がもてる活動になるようコーディネートすることを意識しています。その中で、自分から発表したり意見したりする姿が少しずつ増えてきました。



仮設住宅訪問で相槌や質問をしながら会話を重ね、はじめ「わたしはうまくしゃべられねえがら…」と遠慮していたおばあちゃんから被災当時の写真を見せてもらいながら話を聞き、「あとで送るね」と記念撮影をした花梨さん。「2回目の訪問で笑顔になるようにがんばるね」と手紙に記して送りました。宿泊体験活動の三晩分と戻ってきた後の作文シートの合計枚数は約550枚。文字数換算で10万文字以上です。心と頭を動かし、自分の思いや考え、意見をもっている様子が作文シートの記述から多く読み取れました。

被災地の方の顔を思い浮かべながら募金を進める

昨年度の6月は、保育園訪問の計画は立てながらも全く準備が間に合わず、教師が声をかけたり、手助けをしたりして、なんとか7月の訪問を迎えていました。子どもに委ねるのではなく、教師も共にアイデアを考えながら活動を進めていくことを大切にしていくなかで、子どもが自分たちで考え、実行していく姿が見られるようになっていきます。西山連峰マラソンでの募金活動の折には、三島らしいかたちにしようと「たけあかり」の募金箱をつくらうと考え、準備をしたり、もっと募金のアピールができると考えて、布をもらいに行き、キャッチコピーを考え、ガッシュやポスカ、墨など発色やにじみを休み時間にも試行錯誤したりしながら横断幕をつくりあげ、ミシンを使用してのぼりを作り、持って行きました。「計画をして実行する」という流れではなく、つくりながら考え、つくり変えていくことでよいものにしようとする姿が見られています。

その後も、「ミシマルシェ」、「平和フォーラム」、「みしま祭り」、「女川サンマ祭り」、「ともしびまつり」、「米百俵祭り」といった計8つの地域のイベント、地域の店舗や施設など計11か所の募金箱設置、学校での募金活動で、子どもは依頼文を書き、緊張しながら許可を取り、精一杯声を上げ、多くの方から賛同を得て、たくさんの募金が集まっていきました。

試行錯誤を繰り返し、自分の殻を破る

被災地の現状と被災地の方の思いを伝えようと、被災地のレポートをチラシやポスターにし、タブレットで写真や動画を見せながら募金を求めました。花梨さんと秀斗さんは平和フォーラムで800人以上を前に被災地の現状と募金の呼びかけをプレゼンテーションしました。また、長岡ケーブルテレビ、FMながおか、新潟日報といったメディアに出演し、積極的に広報活動を進めてきました。それぞれのプロジェクトに属し、募金を集めたり、フェスティバルをよいものにしたりと、緊張したり、悩んだりしながら行動してきました。

「俺、やってみようかな…」人前に出て活動することが得意ではなかった啓介さんは、「なないろフェスティバル in 陸前高田」で仮設住宅の方へ送る「歌のプレゼント」4曲のリーダーに立候補し、指揮や練習を進めました。しかし、短い期間ではなかなか歌声や演奏が一つにまとまらず、どう声をかければいいのかを悩み、試行錯誤を重ねました。

ひとりひとりにどう寄り添い、どう成長を促すか

「うまくいったよ良かった。でも、これで終わっちゃうと思うと、正直、寂しいね…」2回目の被災地訪問。全ての交流活動が終わって宿舎に向かうバスの中、そうつぶやいたのは、悩み、くじけそうになりながらも歌の指揮と交流会をやり遂げた啓介さんでした。うなずきながら聞く周りの席の子どもたちの眼差しはとても温かです。行きのバスの中でも歌の練習を繰り返し、「すごく声が出るようになってきました」、「アルトパートはもう少しはっきり歌詞を伝えてください」と、いいところを認め、励ましながらも的確に指示を出し、歌のプレゼントを大成功に導きました。「ふるさと」を一緒に口ずさんでくれた広田小の子ども、涙目で喜んでくださった仮設住宅のおばあちゃん。「ありがとう。本当にうれしい…」と手を握って伝えてくださった温かさ。自分ががんばって来たことで、何かしら伝えることができた…と実感し、うまくいったほっとした表情の中に、充実感や自信が伺えました。

広田の夜空一杯に広がった花火。慰霊の思いを込めた白菊、復興への願いを込めて何発も重なって花開いた金冠柳…。目標金額の50万円を超えようと、放課後や休み時間に準備を重ね、休みの日も声を張り上げて、1724人を超える方から預かった、54万5012円の募金と思い。そこに、嘉瀬さんの思いも加え、144発の花火が咲き誇りました。

成長しているのは司会などで目立った子どもだけではありません。目標金額まで届きそうもないと募金の計画を大幅に増やし、募金活動では何百人もの人を前に、「東日本大震災の被災地、陸前高田に花火をあげようと考えています。募金のご協力をお願いします！」と大きな声で途切れることなくお願いし続けた子どもは、授業中、しっかりとノートを取り、学習に励みながら、発言したり、大きな声を出したりすることは苦手な子です。どきどきしながら、自分たちの思いをテレビカメラの前で、ラジオ番組の生放送で、祭りのステージの上でPRした我が子の姿を見て、「うちの子があんな風に話せるなんて…」と、お家の方が驚いていました。バスの中、交流会ぎりぎりまでプレゼンを制作し、「思いを伝えたいから、歌のプレゼントの歌詞も入れよう」と取り組んでいた裕樹さんに、「裕樹のおかげで、広田の子たちも『ふるさと』、歌ってくれたね」と声をかける姿…。

啓介さんは活動を振り返り、「自分で考えて動いたり、みんなに自信をもって指示を出せたりするようになったことが成長したと思う」と語ってくれました。子どもも教師も、全員が全力を出さなければ超えられない、みんなで乗り越えようと共有できる目標に向かって精一杯助走し、見事にクリアして相手に喜んでもらう経験。得られた満足感や成長は一人一人違いますが、被災地の方と直接かかわったり、長岡で被災地の現状や被災地の方の思いを伝えようと行動したりする中で、自分の限界を超えたからこそ生まれたものでしょう。

しかし、被災地の復興はまだまだです。募金をしてくださった長岡の方へ、被災地の方がどんなに喜び、励まされたのかを伝えるとともに、遠く離れていても、被災地のことを意識し、被災地の方と自分たち、被災地の方と長岡の方が「つながって生きる」には何ができるのかを模索しながら、活動を進めていきたいと考えています。

